

# 琉球大学学術リポジトリ

コロナ禍の学校で  
子どもたちにオンラインでつながりをつくる

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学大学院教育学研究科 公開日: 2022-05-31 キーワード (Ja): コロナ禍, オンライン授業, 多様性, 子どもをつなぐ キーワード (En): 作成者: 丹野, 清彦, 片桐, 功 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24564/0002018000">https://doi.org/10.24564/0002018000</a>

## 【実践研究】

# コロナ禍の学校で 子どもたちにオンラインでつながりをつくる

丹野 清彦<sup>1</sup>・片桐 功<sup>2</sup>

Schools with COVID-19  
— Building student's relationship in online classrooms —

TANNO Kiyohiko<sup>1</sup>, KATAGIRI Isao<sup>2</sup>

### 要 約

コロナ感染予防のため2020年度春、政府は突然の休校を発表し学びの連続性が途切れ子どもや保護者、教員を不安にした。学校は安定してあるものという学びへの信頼が崩れた。1年のコロナ禍の生活を過ごし学びへの信頼を取り戻そうと学校は2021年度の春から学校行事の在り方を見直し、再度の休校に備えいくつもの取り組みを始めた。ここではオンライン授業を想定した取り組みからどのような対応が必要か明らかにする。

キーワード：コロナ禍、オンライン授業、多様性、子どもをつなぐ

## 1 はじめに

2020年の1月以来、毎日のようにコロナ感染の報道が溢れている。コロナ禍により学校では授業改善や学力向上の取り組みが一様に滞り、密にならない学校生活が求められ、授業のありようも共同学習に代わり個別最適な学習がクローズアップされて自学的な学習も取り出され大きく変化した。八木(2021)は主体的・対話的な深い学び等の方針が空疎に響き、アクティブな対話どころか逆に密を避ける工夫が求められたとしている。さらにオンライン授業は盛んになったが、「集う場所を持たない」欠陥が積みまとうとしている。文部科学省(2021)「コロナ禍における児童生徒の自殺等に関する現状について」では、小中学生、高校生の自殺者が令和2年度は499人だと報告された。元年度が399人で、2年度は

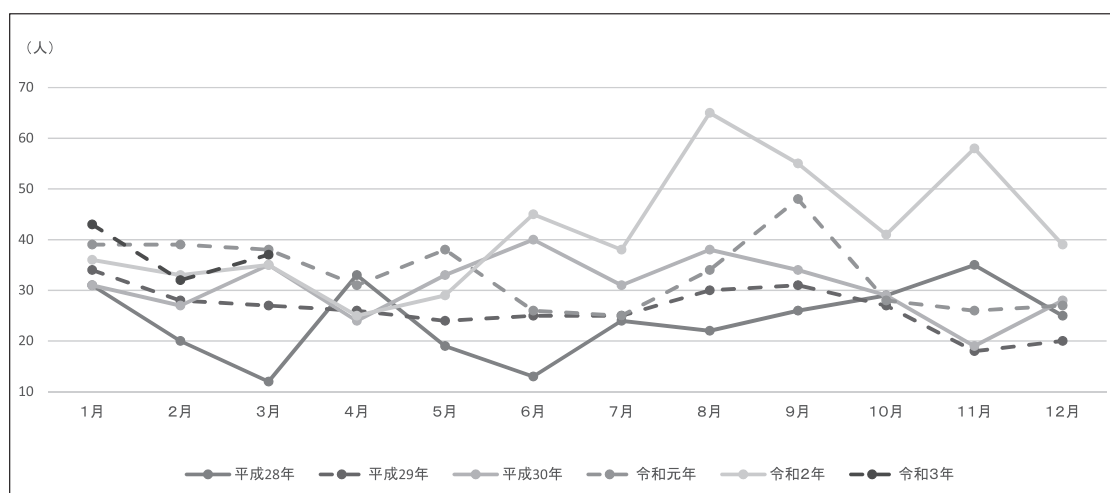


図1 児童生徒の自殺者数の推移

<sup>1</sup> 琉球大学大学院教育学研究科

<sup>2</sup> 浦添市立沢岬小学校

100人増え増加率は3倍を越え不安は広がっている。

さらに調査では自殺の動機として、コロナ感染以前の年から逆転し、進路に関する悩みが1位、次いで学業、親子関係であり、元年度までは学業が最も多い悩みだったが進路の悩みが高まり、鬱など健康に関する悩みが1.5倍に増え上位にきた。コロナ禍で保護者の仕事が安定せず、子どもと大人が向き合う時間が多くなったことが子どもを不安定にさせたという残念な結果を招いたと考えられる。

このようなコロナ禍の生活にあって、どのような変化・特徴が子どもたちに現れているのだろうか。またコロナ感染拡大防止の観点から昨年度休校措置が取られたが、学校はどのように対応し何が重要だったのだろうか。インタビュー調査と実践事例をもとに考察する。

## 2 学校の対応

各学校はどのように対応しているのだろうか。2021年の4月から7月まで沖縄県内の小学校7校と中学校2校、高校2校、支援学校1校に勤務する教師にインタビュー調査を行い、次の3点を質問した。人選については管理職の先生を通じ決めていただいたが、支援学校の教員はこちらからお願いした。

- ① 現在の取り組み
- ② 特徴的な子どもの様子
- ③ 課題

表1 オンライン授業の取り組み

校種	学校	① 現在の取り組み	② 特徴的な子どもの様子	③ 課題
小学校	A	昨年行事を減らしたが子どもの関係が希薄になり今年は可能な限り復活させた。	気になる子に体を動かす、遊ぶ時間を確保し、外で遊んでいる。	教師間のコミュニケーション量が少なくなった。
	B	オンライン授業を検討している。	コロナ感染が不安で1年間、登校しない子がいる。	休校中の食事が取れているか心配。
	C	オンライン授業の準備。	相手の表情が見えず不安と子どもがつぶやく。	教師がコロナ感染を出しまいと必死。
	D	オンライン授業の準備をしている。	時差登校で落ち着くと不登校傾向の子がつぶやく。	オンライン授業ができるか不安。
	E	昨年からオンライン授業を始めた。	コロナ感染が不安と2割の子が休むことがあった。	パソコン操作の苦手意識克服。
	F	密は避けながらグループ活動を実施している。	マスク生活が当たり前であると感じている。	低学年の子にオンラインは可能か。
	G	みんなで話し合い行事を行うことを考えている。	人と関わる経験をしていないので子どもが関わらない。	みんなと行事を経験したことがない。
中学校	A	部活動の再開。	休校以来、放課後生徒のトラブルが増加した。	オンライン授業の準備と教師の対応差。
	B	オンライン授業に備え、パソコン操作を指導している。	感染が不安で休む子が1割程度いる。	バス通学なので感染すると検査が必要
高校	A	オンライン授業の準備と新入生歓迎の行事を実施した。	取り組みを通して笑顔と挨拶が増えた。	高校の面白みを出し、中退を防ぎたい。
	B	可能な範囲でオンライン授業の準備もしている。	授業の中で少人数の場面を多く作っている。	アルバイトが打ち切られ経済的に困難。
支援学校	A	密を避ける工夫、スクールバスの増便要請。	密を避けるのは教室では困難。	密を避けるには職員の増員が必要。

### (1) 小学校7校では

小学校では、オンライン授業に取り組んでいると答えた学校は7校中2校で、取り組もうとしていた矢先に休校になったと5校が答えた。タブレットを子どもに渡したが、操作を指導する前に休校になっ

た、低学年には操作ができるのだろうか、など指導する側の不安が共通して出された。

特徴的な子どもの事例としては、オンライン授業に加え、子どもの健康面に配慮し、生活リズムを7校の教師が共通して取り上げ、2校は子どもの食生活をあげた。食の問題について那覇市の小学校で働く養護教諭は、「先週まで休校だった。ちゃんとお飯食べたか心配だった」と暮らしの問題、命の問題を語った。貧困問題が大きな課題である沖縄では、給食が主な食事である子が一定数おり、休校になると給食が食べられない。そのため、近くの子ども食堂などを探して子どもたちに知らせていると話は続き、保健室の先生は子どもの健康と命のセンターなのだと改めて感じた。

特徴的な子どもの様子として、「うちの学校では、昨年全く登校しなかった子どもがいます」と話す教師がいた。「子どもに持病があり保護者が感染を恐れ、ずっとお休みです。子ども以上に保護者が不安そうだ」と語った。保護者の不安が子どもの心理に影響していることを語っていた。また高学年の女子が「友だちが本当はどう思っているのかわからない」と不安を吐いた事例を語る教師もいた。マスクで友だちの表情が見えず、疑心暗鬼になっていると話した。さらに教師の中には、「感染者を出したら自分のせいだとプレッシャーをかけている。担任というのは孤独に見える」と、緊張感の高まる職員集団のありようを指摘し、先生たちは孤立しているとも語った。

## (2) 中学校では

中学校では部活動と体の問題、トラブルの関係が話された。2校とも「うちの学校は部活を再開した」と話し出した。緊急事態宣言が発出され部活動はいったん中止になり、生徒も時間を持て余しているんでしょうと断り、部活動が休みになるとSNSに関するトラブルが目に見えて増えた。放課後公園で遊んでも些細なことから手を出す暴力行為が報告され、4月から休校になるまではこれに準じたトラブルはなかったと首をかしげた。生徒に殴った経緯を聞くと自分でも分からないと静かに泣いたようだ。この背景に何があったのか。職員で探ったそうである。そこから、保護者がコロナにより仕事を辞めさせられ失業しているケースが予想以上に増加しており、部活の休止で親子が家で顔を合わせている。そうでなくても思春期、反抗期の子どもが親と顔を必要以上に合わせてはうまくいかない。加えて親のストレスや経済的な不安で、双方がいら立っているのではないか。せめて体を動かし発散させようと部活再開に動いたそうである。

先のコロナ禍における児童生徒の自殺等に関する現状（文部科学省、2021年）では、動機の2位が進路に関する悩み、3位が親子関係の悩みという結果になっており、相互に関係がありそうだ。部活再開の会議は、感染リスクを巡って意見が分かれ、一律に参加と決めず、生徒と保護者で話し合い、不安な場合は継続して休んでいいことを付け加え落ち着いたそうである。運動部活動の現状について（文部科学省、2017年）では、生徒が部活動に求める条件として、マイペース、楽しめること、適度な練習日程と時間をあげており、適度な部活動は生徒の精神的ストレスを解消する有効な手立てであると思われる。特徴のもう一つは、オンライン授業への取り組みである。2校に共通して出されたことは教科によって、タブレットを使うには温度差とスキルに開きがあることだった。小学校では教師の個人差だったが、中学では、教科により一定の傾向があるようだ。

## (3) 高校では

高校を調査で訪れると、その日は生徒会主催のスポーツ大会だった。迎えてくれた教師が体育館を指さし、「少しでも楽しい事をしないと生徒も持ちません。感染予防を徹底して大会を開催しました。勉強だけでは高校の楽しさが伝わりません」と話した。担当は高校が抱える不登校や中退の現状を熱心に語り、不安な生活の中だからこそ、楽しいイベントは省略できないと話した。

実業高校では管理職が対応してくれ、生徒総会もオンライン、PTA総会は書面開催と密を避けてい

ると話した。「授業でどんな配慮をしているのか」と質問すると、「実業系は多くの教科が習熟度別、少人数で実習はグループになるからもっと人数が少ない。感染リスクは低い。コースや選択科目で個に合わせています」と答えた。予想外の手厚さに驚いていると、学校としては、高校を卒業しようという意欲を育てることに力を注いでいると語った。ここでも沖縄県が抱える高校中退の課題にも触れ意識化されていた。

休校になると高校でも喧嘩や深夜徘徊、経済的なトラブル、アルバイトの打ち切りなどが、一昨年から明らかに増えている。高校進学率は全国が98.8%で沖縄県も97.3%と増えている。しかし高校生の不登校数は1,000人あたり27.3%、中退率も2.3%と沖縄県は他県と比較して最も高くなっている。中退の理由は学業不振、学校が合わない、進路変更が約8割で全国と同じ傾向であるが、経済的な理由が他県より倍以上高く、10%弱で続くのが沖縄県の特徴である（文部科学省2020）。感染対策を取り果敢に高校の面白さを提示し、生徒の興味を引き出そうとしているのは、これらへの対応策だと考えられた。

高校は、中学校と同様の傾向を示したが、中学校と異なる点は、オンラインには生徒が対応できる点である。学校としてはスタジオを作り教師がオンライン授業を行える環境を作っていることなどを話してくれた。課題としては2校とも生徒の経済的な面を挙げた。保護者の経済的な不安が生徒の進路や心理に影響を及ぼし中学と同様にトラブルが増加したことを話してくれた。

#### (4) 支援学校では

支援学校の先生に「密を避けることはできますか？」と質問を始めると「バスを増やしてほしいと交渉したんですよ」と異なる方向から返ってきた。「支援学校に送迎用のバスがあり、密を避け乗車人数を制限しよう。だったらバスを増やさなければと校長が交渉した。何度か交渉し、理解を得ることができ、バスも増便されバスに同乗する補助員も増員した。校長がおれも頑張ったぞと喜び合った」と笑った。支援学校にはバスが準備され送迎に使用している。送迎時バスの中は密になっている。また支援学校に登校する子どもは、病弱や他の病気を抱えていることも少なくない。健康面を考えての交渉であり、当然の取り組みと思われる。

しかし、バスを増便するとバスに同乗する職員の増員が必要となり、その学校では臨時職員が2名増やされたが十分ではなく、学級担任らが勤務形態を変更してバスに乗ったことを話してくれた。密を避けるには教員の増員が必要であることを物語っていた。

これらの調査に共通していることは、①オンライン授業の実現と職員のパソコンスキルの向上、②子どもの生活改善と求めているものであり、実施の仕方によっては子ども同士の関係を作ることになると思われ、子ども同士のトラブルを減らす積極的な指導とも捉えられる。そこで1章と2章、5章は丹野、3章はオンライン授業に2年にわたり取り組んだ片桐、4章は丹野と片桐が共同で考察した。

### 3 オンライン授業の試み

#### (1) オンラインで何か楽しいことができないか

新型コロナウイルスが広まり始めた2020年3月初旬、全国の殆どの学校が突然休校になった。沖縄県浦添市立沢岬小学校（以下、本校）でも他の多くの学校と同じように、急遽プリントを印刷し、宿題として子ども達に渡した。子ども達はずっと家の中で一日中過ごすことになった。

長い引きこもり生活は、子どもの心や体に影響がある。休校はどんどん延長された。入学式も始業式も無い、担任の顔も分からない、友達と合うことも無くゴールデンウィークが近づいた。このころ、県外の先進的な学校でのオンラインで学校と家庭をつないでいる取り組みが報道され、沖縄県教育委員会からもオンラインツールを使う提案が出された。校長に相談したところ、オンラインで何かできること

を考えよう、何かチャレンジしてみようということになった。

しかし、オンラインの取り組みは学校だけでできることではない。家庭の協力と子どもの参加が必要だ。そこで、家庭と子どもの実態を知ることにした。オンラインの取り組みは家庭にとって助かることなのだろうか。オンラインの取り組みに使える端末はあるのか、Wi-Fi環境は整っているのか。4月早々にまず家庭へのアンケートをとることにした。教頭がGoogle Formでアンケートを作り、保護者メールに一斉配信した。513家庭中、366家庭が回答した。アンケートの項目と結果の一部を図2に示す。

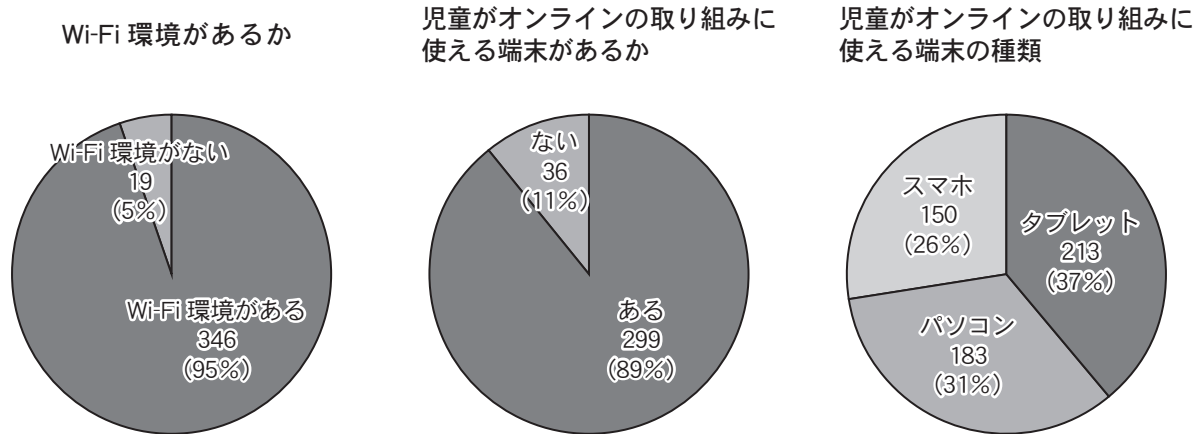


図2 オンラインの取り組みについての家庭環境

95%の家庭はWi-Fi環境が整っている。残りの5%の家庭は携帯電話回線でスマホを使っている家庭と、スマホが無い家庭に分かれるだろう。前者ならばオンラインの取り組みにある程度活用できるが、後者は活用できない。児童がオンラインの取り組みに使える端末は、89%の家庭が「ある」と回答した。「ない」と回答した36家庭のうち、家庭に端末が全く無いのは2家庭であった。児童がオンラインの取り組みに使える端末の種類はタブレット、パソコン、スマホの順に多かった。さらに「オンラインの取り組みを計画していますが、心配なことがあればお書きください」との任意回答で集まった206の記述を分類したものを表2に示す。

最も多かったのは、操作や具体的実施方法についての記述だった。親と一緒にいて補助する必要があるのか、具体的にどのように実施するのか等の内容だった。次に多かったのは環境についての記述だった。必要機材を購入する必要があるのか、Wi-Fi環境が無い、兄弟姉妹が多くてもできるのか等の内容があった。このことから主に、次の2点がサポートとして重要であることが分かった。

◆操作への対応

◆オンラインが可能な環境づくり

オンラインの取り組みの不安についての記述欄を設けたにもかかわらず、ぜひ実施してほしいという賛成の記述が14件あった。「よく分からない」「できない」等の漠然とした不安は5件だった。様々な家庭の状況に対応しながら、オンラインの取り組みを進めてほしいと多くの家庭は考えている。プロジェクトチームで分析や討論をしながら、アンケートの結果をそのように受けとめた。

さらにアンケートの結果を職員会議の議題として取り上げ共有した。ここでは少数ではあるが、Wi-Fiの環境がない家庭について検討し、どのようにサポートするかについて話し合った。同時に保護者がタブレットを使わず困る場合は、校長や教頭も含め電話で対応し、それを全家庭に知らせ、先の課題に対応することにした。アンケートの項目を整理すると次のようになる。

表2 オンラインの取り組みを計画していることについての心配事 ( )内は記述数

カテゴリー	サブカテゴリー	主な記述内容	
操作 実施方法 (90)	親のサポート(35)	・仕事等で日中親が不在なので親の操作補助や学習補助ができない ・親の負担が大きい ・低学年なので親と一緒に操作することが必要	
	具体的方法(19)	・オンライン学習の時間帯、実施時間が知りたい ・ライブか、録画映像なのか ・いつでもオンライン学習ができるのか、決まった時間に参加しないとイケないのか ・やり方を詳しく教えてほしい ・書く習慣が無くならないようにしてほしい ・スマホでも見やすい文字の大きさにしてほしい ・後からでも受講できるようにしてほしい ・一人一人の子どもが「担任の先生が見てくれている」と思えるようにしてほしい、はげましてほしい	
	ついていけるか(14)	・子どもが飽きそう、集中が続かなそう ・理解できるか心配 ・自分で計画的に取り組めるか心配 ・新一年生のため、自分で時間の管理ができない	
	操作(11)	・一年生でも操作できるのか ・設定、操作がうまくできるだろうか(親も子どもも)	
	個別対応 見とり評価(11)	・親が子の学習取り組み状況を把握したい ・学習内容を理解したか、定着したか、どのように把握するのか ・個別に質問ができるのか ・分からないところはどうしたら良いのか ・テストもオンラインで実施するのか	
	必要機材(26)	・プリンター、Webカメラ、パソコン、タブレットなど、何か必要なのか ・親がいない日中は、家に端末が無い ・必要なものを用意する費用が気になる	
	通信(22)	・Wi-Fi環境が無い ・回線が不安定、遅い、容量が少ない	
	環境(83)	兄弟姉妹(15)	・兄弟姉妹でオンライン学習の時間が重ならないようにしてほしい ・兄弟姉妹が多い家、小さい弟妹がいる家なので、集中できない ・兄弟姉妹、一人一台の端末が用意できていない
	スマホでできるか(9)	・スマホは画面が小さくて学習しにくいことや、視力低下が心配 ・スマホしか家に無いが、スマホでできるのか	
	学童親戚の家(8)	・日中は学童で過ごしているが、学童ではオンライン学習ができない ・日中は祖父母や親せきの家で過ごしているが、オンライン環境が無い	
セキュリティ(3)	・オンライン学習で使用する端末やアプリの安全性が気になる		
賛成(14)	・学習のため、生活習慣の形成維持のため、ぜひ実施してほしい		
視力低下(5)	・ゲーム、テレビ、動画視聴が増えている状態なので、さらに画面を見る時間が増えると目に良くない ・今までゲームを禁止していたが、オンライン学習がきっかけでゲームを始めたら、視力低下が心配 ・視力低下が心配		
その他(33)	漠然とした不安(5)	・よく分からない ・できない	
運動不足(3)	・子どもがずっと家にいて運動不足なので運等する機会が欲しい		
勉強以外の使用(3)	・ゲームやネット動画の時間が増えないか心配 ・勉強しているのかゲームしているのか分からない		
既に活用(3)	・今使っているオンラインドリルの接続が不安定、難しすぎる ・既に塾や習い事でオンライン学習をしている		

## (2) 職員間の意見の違い

家庭からのアンケート結果とオンラインの取り組みを職員に提案した。パソコンが得意な青年教師は「やってみよう」と言った。ベテラン教師は不安そうで「周りの学校がやっていないのに、なんでウチだけやるの」という不満もあった。アンケートの「もし、ご家庭でこまっていることがあればお書きください」という自由記述欄に書かれた保護者からのメッセージを読み上げた。

- ◆教科書をもったのですがどのようにして子ども達へ指導して良いのかわからずにそのままの状態となってしまうています。
- ◆1人で留守番しており全く外出していません。精神的なストレスが心配です。どこにも連れて行けないので、家庭内で出来る事をさせたりしていますが、限界があります。オンラインでのクラスメンバーと話出来れば、少しは、元気をもらえるかもしれません。早く終息を願うばかりです。
- ◆息子は学校が好きで好きで、友達に会いたいといつも思っている。今の状況も、息子もわかっているのですが、心、気持ちがおれそうです。1日中見て過ごしたいのですが、仕事もあるし。だからと言って、喘息の息子を連れだすのも、感染が怖くて。いろいろ考えます。命を一番にお願いします。みんなに会える、少しの時間が欲しい、作ってあげたいです。

家庭の切実な思いが表れている。新年度になって約2ヶ月。子どもと親は担任の顔も分からない。1年生はまだ一度も学校に来ていない。ずっと家の中でしんどい思いをしている。職員もそのことはよく分かっていた。本校は不登校傾向の児童が多く、休校をきっかけに不登校が増加しないかという心配もあった。しかし、家庭環境によってオンラインに参加できない子もいる。オンライン学習なんて今までやったこともない。そこでまずは学習を進めることを目的とせず、子どもと学校をつなぐことを目的として、任意参加のオンライン朝の会をやってみようということになった。同時双方向のテレビ会議システム(当初はWebex, 後にZoom)を使った。

## (3) それでもやってみよう(春のオンライン朝の会)

「学校と家庭をつなぐ」をテーマに、5月13日から15日の3日間、オンライン朝の会を実施した。テレビ会議システムを初めて使う先生も多いため、情報担当の職員がスタジオとなる教室を準備し、学年で実施することにした。また、兄弟がいても家庭にスマホ1つあれば参加できるよう、各学年15分で、学年ごとに時間をずらして実施した。「進級おめでとう」という学年・学級開きと担任の自己紹介から始まった。毎日、健康観察、クイズ、コロナ対応の注意事項、連絡事項などを行った。約50%の子どもが参加した。家庭から「担任の顔が見られて良かったです」「朝の会が楽しみで、子どもが朝起きられるようになりました。休校で乱れがちな生活習慣が整いました」「学校から離れそうになった子どもの心をつなぐことができた」等の感想をもらった。子どもがいない学校では職員の元気が無かったが、画面越しで子ども達の前に立つ職員は生き生きとしていた。

## (4) 次の休校に向けての準備

6月になり休校が開けたが、コロナが心配で登校できない児童が多い日には100人ほどいた。またいつ感染者が増加して休校になるか分からない。春の休校時は復習のプリント学習が中心だったが、次の休校時もプリント学習にすると当該年度の学習が終わらなくなる。文部科学省も沖縄県教育委員会も浦添市教育委員会も、休校時に子どもの学びを止めないことを何度も発信していた。次の休校に備えて準備を進めた。まずは、校長と相談しオンライン授業プロジェクトチームをつくって、各学年から1人ずつ入ってもらった。次に学習支援ツールの準備を進めた。市内の小学校では以前からロイロノートを授業で用いていた。これまでは校内でしか使えないサーバー版だったが、各家庭からも使えるクラウド版になった。家庭からロイロノートを使うことができれば、子どもが書いたノートやワークシートを写真



でアップできる。動画のやりとりもできる。IDとパスワードを全児童に配布しログインの練習をした。

### (5) オンライン授業実施までの手順

オンライン授業実施までの手順を、ステップ0からステップ3にまとめた(図3)。ステップ0は準備として、家庭の実態調査を行う。ステップ1はアプリのインストールとログイン。地域や学校によって使えるアプリが異なるだろう。本校はロイロノートとZoomを中心に使うことになった。ステップ2は、学校で試してみる。学校で試してみる。家庭で取り組むときと同じようにIDとパスワードを入れて基本的な操作を行う。家庭にいる子どもに使い方を教えるのは至難の業である。学校にいるうちにある程度使えるようになってほしい。ステップ3は家で試してみる。慣れない家庭にとっては大変なことだ。できれば最初は宿題として家庭でログインをして何か提出してもらうことを宿題にすると良い。半分ほどの子どもが「できませんでした」と言う。理由を聞いて対応を教えながら何回かチャレンジしてもらってようやく家で使えるようになる。

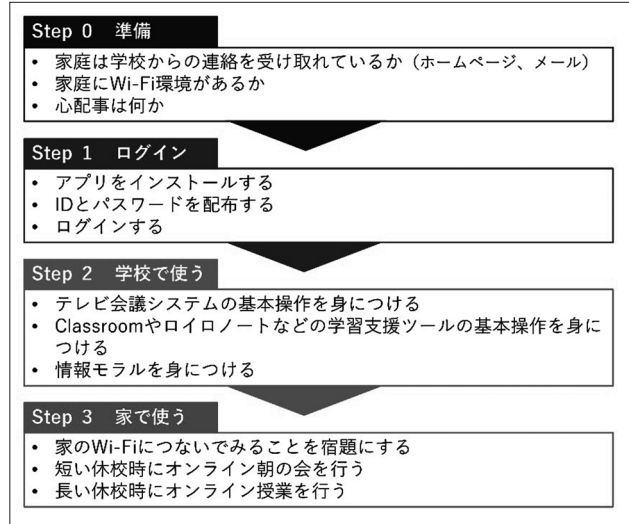


図3 オンライン朝の会で演奏会

### (6) オンライン朝の会からオンライン授業へ

春の休校の影響で短くなった夏休みが終わるころ、再び新型コロナウイルス感染者が増加し、そのまま臨時休校となった。今回のテーマは「学習をつなぐ」こと。休校になっても学習を進められるよう、Zoomとロイロノートの2つのツールを準備してきた。しかし、家に端末が無い等の理由でオンラインには参加できない子どももいる。そこで、紙ベースの学習を基本とした上で、オンラインに参加できる子どもは、各学年15分のオンライン朝の会 (Zoom) に参加し、課題をロイロノートで提出することにした。

徐々に職員がZoomに慣れてきて、オンライン朝の会の内容が前回に比べて充実した。健康観察や連絡事項だけでなく、活動やレクリエーションを取り入れた。読み聞かせ、ラジオ体操、ダンス、リコーダー、歌唱、コンサート、じゃんけん、クイズ、イントロクイズ等が各学年で実践された(図4)。さらに、みんなで音読をしたり、ノートの見本を紹介したりするようになり、オンライン朝の会が、オンライン授業になっていった(図5)。

子どもはその日の課題が終わると、書き込んだ副教材やノートを写真に撮って、ロイロノートで提出した(図6)。担任は丸付けをしたりコメントを記入したりして応答し、子どもに返却した。課題のやりとりで応答関係ができ、子どもの励みになった。担任は子どもの学習状況を把握できるようになった。



図4 オンライン朝の会でコンサート



図5 オンライン朝の会が授業へ



図6 ロイロノートで課題提出

## (7) 職員の変化

便利なオンラインツールによって、学習をつなぐ取り組みを前に進めることができた。しかしもっと大切なことは、不安を払い学びの連続性を確保することではないだろうか。面白いことをしようということになった。Youtuberを見習って、担任が楽しいゲームを考えてやってみた。子ども達は楽しそうだった。最後の日にリコーダーで「栄光の架け橋」を子ども達に吹いてもらうときには、職員10人くらいで色々な楽器と歌を担当した。職員のコンサートのように、半分くらいの子供達はリコーダーの演奏をやめて見入っていた。学校が再開して登校した子ども達の話は、楽しいオンライン朝の会のことだった。

各学年それぞれ工夫をしていた。「Zoomでは目線の高さを合わせて話すようにしています」「毎日全員の名前を呼んで、一人ずつ返事をしてもらっています」「ロイロノートで質問やメッセージのやりとりを一人一人としています」「クイズの回答などを、何かに書いて画面に出させることがZoomのレクのコツです。こうすると全員が自分の考えを表現できますから」など様々な工夫を職員が交流会で教えてくれた。意外だったことは、不登校の子ども達がオンラインに参加したことだ。不安を抱える子どもたちにとっては、オンラインの距離感が安心感になったのだろう。休校明けの分散登校の際にも不登校の子ども達が登校し、職員室で話題になった。普段の教室は精神的に過密すぎるのかもしれない。

## (8) 子どもたちの求めているもの

子どもたちの感想を紹介する。

- ◆家でのかだいの学習は、みんなと一緒に勉強できなくて、どう進めたらいいか分からなくて不安がいっぱいだった。オンライン朝の会が、みんなの顔を見られるきかいだったので、友達が元気を発見るところだからうれしかった。あと先生たちが勉強のやり方を言ってくれたからできた。
- ◆みんなの顔を見たり、先生が今日の宿題を教えるなどのことをしてもらえて、また笑顔になることができました。
- ◆みんなに会っていなかったのも、みんなのかおがみれたのでよかったです。オンライン朝の会もよかったです。ロイロノートのがくしゅうでは、みんなが出しているのかもわかって、じぶんもださないと、となってだしました。じぶんでがくしゅうできました。

お互いの顔を見て話して元気になった、自分ひとりで学習するよりやりやすかったと子ども達が感じている様子がうかがえ、教師のように授業を進められたなどの感想は少ない。最も多いのは、「みんな」という言葉である。子どもたちはオンライン授業を通して相互の顔を見て安心していると思われる。一見個に分かれた取り組みのようであるが、子どもたちは子ども相互のつながりを求めている。

## (9) 見えてきた課題

### ① 端末、Wi-Fiが無くて参加できない子ども

参加率が伸びたとはいえ参加できない子ども、家庭があった。約2割の子どもがオンライン朝の会にもロイロノートにも参加していなかった。家庭の格差が学びの格差を生んでいる。端末をすべて子に平等に確保するための公的な働きかけと保護者に向けた操作サポートセンターを学校内につくる必要がある。

### ② 個別指導がしにくい

教室にいれば、周りの子や教師がさっと手助けできるのだが、オンラインではそうはいかない。どの子が困っているかも分からない。画面からいなくなってしまう子、何か食べている子、反応がない子、同時に別のことをやっている子がいるなど課題が明らかになった。これは対面授業の良さも見直すことができた。

### ③ 受け身の授業になりやすい

オンライン授業では、つい教師が一方向的に話すだけの授業になってしまう。子どもは見るだけ、聞くだけ、写すだけという授業はすぐに飽きる。新学習指導要領が求めているような主体的・対話的な授業をオンラインでも目指したい。しかし主体的・対話的な授業をするためには、通信環境や端末等の整備、ICT活用能力、さらに教師の授業力も必要となる。オンライン授業のレベルを3段階にまとめた(図7)。最初は一斉伝達型が多いが、次第に課題をやり取りし、対話型の授業を目指したい。

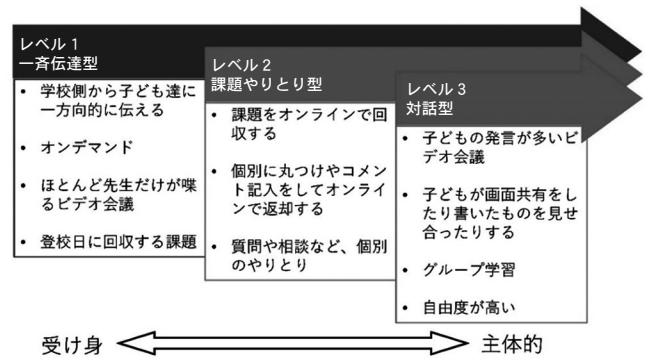


図7 オンライン授業のレベル

#### (10) ついに全員が参加

2021年6月に3回目の休校、8・9月に4回目の休校になった。今年もテーマはつなぐこと。目的は生活習慣の維持、心の安定、学びを止めないことの3点とした。前年の課題の一つは、親が仕事に行っている日中に子どもが端末を使えない家庭が2割ほどあったことだ。GIGAスクール構想の推進により2021年3月に本校にも児童1人1台のiPadが導入された。休校中にこのiPadを家庭に持ち帰ることができるようになった。家庭にWi-Fi環境が無い児童は学校でオンライン授業を受けることができるようになり、ついに全児童がオンライン授業を受けられる環境が整った。

また、職員のICT活用技能の向上のため、Zoomの使い方の講習会を実施した。去年は情報担当がセッティングを行ったが、今年は各学年、各担任が行うことにした。そして職員間のコミュニケーションツールを充実させるため、Office365の使い方、特にTeamsのアプリの使い方の講習会を行った。1年生から6年生まで全ての学年、学級がZoomを用いたオンライン授業を実施し、ロイロノートを用いて児童が課題を提出することができた(図7のレベル2)。さらに5年生と6年生では、学級やグループ単位で子ども同士の対話的な学習をオンラインで行った(レベル3)。Zoomをつなぎながらロイロノートを用いて授業を進める学年・学級もでて、ロイロノートは課題提出のためだけではなく、授業の一部になっていった。

## 4 考察

インタビュー調査で得た特徴2点とオンライン授業実践を照らし成果と課題を考察する。

### (1) オンライン授業の実現と職員のパソコンスキル

学校全体でのオンライン朝の会、オンライン授業という大きな取り組みは、なぜ実現できたのか。それは子どもや家庭の何とかしてほしいという願いと職員の何とかしたいという思いから出発したからだ。「分からない」「できない」「苦しい」「昭和に戻りたい」と嘆きながらもYoutuberさながらに取り組んできた。カメラや人の前に立てば、教師は生き生きと演者になる様子を見た。学校で一つ課題を設定しその解決に向けて取り組むことは、通常は校内研修・研究として各学校で取り組んでいる。校内研修・研究がうまくいくための方法の一つは「担任の願いからスタートする」(片桐, 2019) ことである。今回の取り組みの良さは現場のニーズから始めることで子ども、職員、保護者が自分事と捉えると、チャレンジが生まれることが確認できた。コロナ禍のニーズから始まった取り組みだが、子どもや家庭のニーズを調べ、具体的な計画を立てた。やってみて、子どもや家庭の反応から手ごたえを感じたり、新たな課題が見えたりした。その繰り返しだった。このようなプロセスを取る(図8)ことを発見したことも

重要な成果だ。必要なことは、保護者や教員の不安を聞き取り、具体的な対応策を示し実施することにより、不安を解消することである。不安を聞き取りそれに対応し職員や保護者が見通しを持つ、そこまでのサポートが重要である。

(2) 子どもの生活改善と求めていたもの

オンラインの取り組みを始める前の実態調査、合計4回の休校時のオンライン朝の会等の取り組みと感想をまとめた(図9)。2021年度の休校明けに子どもが書いた感想を分類すると「分かりやすかった」という記述が多い。しかし同じくらい多かったのが「朝の会のクイズが楽しかった」「友達とのグループでの話し合いが良かった」という感想だった。オンライン朝の会は子ども

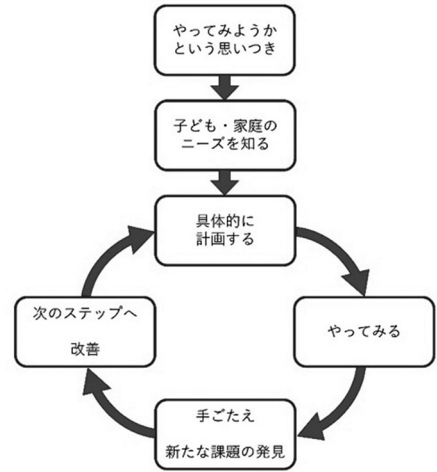


図8 取り組みが進むプロセス

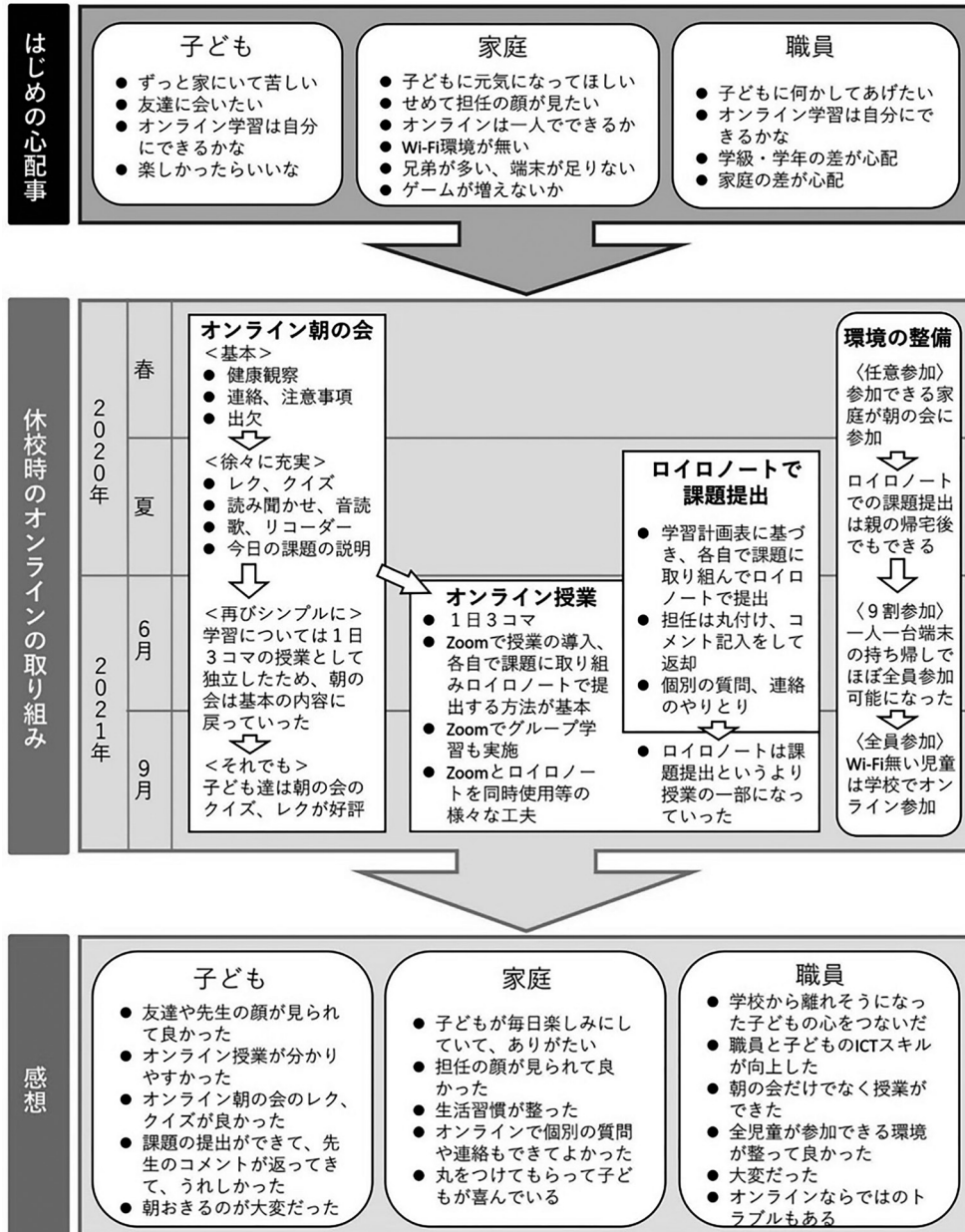


図9 オンラインの取り組みのまとめ

が起きる励みになった。しかも、他の子に会えるという楽しみがあり、子どもはつながりも求めていた。昨年最初の休校時にも同様に子どもの声が聞こえたので、今年度は積極的にグループ活動を取り入れ試行した。子どもたちはオンライン授業においても人と出逢い、話し合う、調べるなどの共同的な活動を求め楽しみにしていた。このような授業を展開する上で重要なのは「つなぐ」ことで、子ども同士の関係性を強める視点を持つことである。

### (3) GIGAスクール構想と学び

GIGAスクール構想の目的は、個別最適化された学びや創造性を育む学びの実現が目的だが、2年にわたる今回の実践例から、子どもは授業で何を求めているのかが明らかになった。そこには通常の授業と同様に参加型の授業がまとめられている。その上、オンライン授業のように他者と対面できず、一定の距離があるほど人と人のつながりを感じる授業を求めていた。いわば共同的な学習の良さを一層追求し、オンライン授業やタブレットを使う授業にも取り入れ、子どもと子ども、タブレットと対面の授業の組み合わせ等の相互の交わりを増やすことが重要である。タブレットを中心に活用する授業は、実践でも当初教師の説明が増える傾向にあったが、子どもの声を取り入れ、子ども同士の交流場面を増やしていくと変化が生まれた。オンライン授業はコロナ禍の学校で注目を浴びたが、主役は子どもであり、タブレットは手段である。それらを含んだ柔軟な学びをどのように休校の学校でも日常の学校でも実現、実践していくのかということが今後の課題となる。

## 5 終わりに

コロナ禍の学校生活は今しばらく続きそうである。コロナ感染による休校措置により、タブレットが配られGIGAスクール、オンライン授業の取り組みが加速して進んだ。この実践を通して教師にはどのようなICTのスキルが必要なのか、教師はどこで戸惑うのか等も把握することができた。この戸惑い、スキルを補うためどんなサポートが求められるのかを整理する必要がある。

他方、文部科学省の児童生徒に関する問題調査の結果によると令和2年度はコロナ感染予防のため休校措置により、いじめや学校での暴力行為は減少した。この結果は登校日数が減少したための一時的なものと考えられるが、不登校児童生徒数は増加した。背景には、保護者の感染への不安が児童生徒に投影されたものとの指摘もある。保護者の不安や児童生徒の不安を解消する取り組みも必要ではあるが、登校しないという選択も一つの権利として見れば、今回の実践は、登校しない選択をしている子どもたちの学ぶ権利を保障する際にも適応できる。この視点からもオンライン授業を進めていくことが求められており、さらなる取り組みを進める必要がある。

### 【文献】

- 青木将幸, 2021, 「オンラインでもアイスブレイク！ベスト50」ほんの森出版。  
片桐功, 2020, 「校内研修・研究の課題調査と課題克服の試み—授業改善リーダーからのアプローチ—」『琉球大学大学院教育学研究科高度教育実践専攻年次報告書』4:73-80。  
教育の未来を研究する会, 2021, 「教育動向2021」明治図書  
大谷真樹, 2019, 「2030年に生き残るために世界で学べ」サンルクス社  
ポール・タフ, 2017, 私たちはこどもになにができるのか」英治出版  
文部科学省, 2021, 「コロナ禍における児童生徒の自殺等に関する現状について」  
[https://www.mext.go.jp/content/20210216-mxt\\_jidou01-000012837\\_003](https://www.mext.go.jp/content/20210216-mxt_jidou01-000012837_003) (2021/9/23最終閲覧)  
文部科学省, 2020, 「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について」,  
[https://www.mext.go.jp/content/20201015-mext\\_jidou02-100002753\\_01](https://www.mext.go.jp/content/20201015-mext_jidou02-100002753_01). (2021/9/23最終閲覧)  
西川純, 2019, 「個別最適化の教育」学陽書房。  
八木英二, 2021, 「コロナ禍の教育編成と方法」『民主主義教育のフロンティア』旬報社, 208-221.